

シリーズ「アジアほっつき歩く記」第74回

マレーシア ボルネオを歩く

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアンウオッチャー

日本から一番近いマレーシアであるボルネオ島。世界でも3番目に大きいこの島は、マレーシア、ブルネイ、インドネシアの3つの国に領土が跨っている。ビーチリゾートも充実しており、大自然も体験でき、日本からの直行便も飛んでいるサバ州コタキナバル（以下 KK）を今回28年ぶりに訪問した。サンダカン、そしてブルネイと合わせてご紹介したい。

サバティーガーデン

サバ州の州都 KK。東京から直行便で約6時間。空港から街も近く、便利だ。街は南シナ海に面し、リゾートホテルも充実している。ボルネオ島自体は18世紀にイギリスがやってきて、開拓されている。第2次大戦後、第一の都市だったサンダカンが連合軍の空爆で壊滅し、港機能が移転したことで KK の発展は顕著になる。

KK からバスで2時間余り。4000m級のキナバル山の玄関口で、登山を楽しむ人々が降りて行く。そこから更に1時間ほど行くと、サバティーガーデンの看板が見え、メイン道路から山に入っていく。実はこの道は近そうだが、歩いたら1時間近くかかる。そんな山の中に忽然と茶畑が広がり、コテージが見える。

ここは1970年代にサバ州が開発した新しい茶園。以前は広大なジャングルだったという。マレーシアといえばキャメロンハイランドの茶畑が有名だが、ボルネオ島唯一の茶園であり、インドからアッサム種を持ち込み、紅茶作りを始めたという。現在も紅茶の生産は順調で、生産量を伸ばしている。

自然環境は抜群で、朝早く起きるとキナバル山がはっきりと見え、茶畑と相俟って何とも清々しい。ただそれもすぐに霧に包まれてしまう。朝ここで飲むサバティーは格別な味がする。美しい茶園を持つ日本もインバウンドを組み合わせた取り組みをするとうまいと思う。

サンダカンで思う

1970年代『サンダカン八番娼館』という本を読んだことがある。作者の山崎朋子さんが昨年亡くなったという記事を読み、それで記憶が蘇った。そのサンダカンはボルネオ島最北端の街、サバティーガーデンから山道をバスで3時間ほどかかる。なお、この道は第2次大戦中に日本軍がイギリス・オーストラリア人捕虜に死の行進をさせた場所として知られている。

サンダカンに来た目的、それはずばり日本人墓地に行くこと。中国人墓地の先をずっと歩いて行くと、日本人墓地がある。日本語で墓碑が書かれており、名前でなく戒名が書かれているのは、やはり日本からの出稼ぎ女性たち「からゆきさん」のものだろう。からゆきさん以外にも商人や船員など、この地で亡くなった方が葬られている。遠くに海が見える山の斜面、何とも言えない気分になる。

猛烈にやぶ蚊



写真1 サンダカン 日本人墓地



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



に刺される。痒くて仕方がないが、何かを語られているような気になり、蚊を叩くことすらなく、ただただ海を見ながらじっと耐えていた。そんなことをしても、からゆきさんの供養にすらならないことは分かっているが、そうせざるを得ない心持ちになる。かなり長い時間そこに突っ立っていた。

お墓の近くには、イングリッシュティーガーデンというカフェがあり、庭から海の景色を楽しめる。お茶を飲んでいると、日が落ち始めた。からゆきさんもこのきれいな夕陽を見たのだろうか。サンダカンは時間が止まったような、本当に静かな街だった。



写真2 ブルネイ 夕日に輝くモスク

ブルネイとは

KKを朝8時のフェリーに乗るとラブアン島には11時半前に着いた。ブルネイ行きのフェリーは13時半発だから、約2時間島に滞在した。ラブアン島といえば、アジア金融の世界に身を置いた者としては何とも懐かしい。ここはマレーシアのタックスヘイブンで、マレーシアの外国企業が海外で資金調達する場合、ここラブアンに法人を設立して窓口としていた。まさかこの島を実際に訪れることになろうとは、思いもよらなかった。

フェリーから見えた島は、一部に近代的な建物があるものの、全体としてはのどかな場所で多額の資金が動いているようには見えない。街を歩いてみても、マレーシアの田舎町の雰囲気が出ている。ターミ

ナル前では免税と書かれた酒などが売られているが、国内で酒が買えないブルネイ人が買うのだろうか。

1時間半の船旅で、ムアラというターミナルから公共バスで1時間。ブルネイの首都バンドルスリブガワンに到着したが、料金は僅か1ブルネイドル(約80円)だった。因みに、ブルネイドルはなぜかシンガポールドルとリンクしており、どちらも流通しているらしい。

ブルネイはマレーシアと同じような場所と思い、何の下調べもせずに向かったところ、驚くことばかり。観光客が必要としている両替所やスマホのSIMカード購入場所を探すのに苦労する。しかも、競争原理が働いていないので、SIMカードはスピードが遅い割に非常に高い。

ブルネイは王様が絶対君主であり、イスラムの戒律も厳しい。毎週金曜日の昼間12-14時は、国内の全ての商店、官庁、交通機関などが機能を停止して、祈りの時間となるなど、現代の国家では普通考えられないようなルールも存在する。この間、観光客はなすすべなく、ホテルで休息するしかない。ブルネイと言えば、金持ち国家というイメージがある。確かに、国民はそれなりに豊かな生活を送っているが、それは資本主義の豪華さではなく、イスラムの戒律のもとで、静かな豊かさといった雰囲気強い。

訪れた日は、年に一度の建国記念日だった。王様が豪華な王宮を出て広場にお出ましになるというので、大勢の人々で埋まり、外国人は宿泊先すら確保が難しかった。石油などに裏打ちされた豊かな財源をベースに、高度に安定した国家を築いているブルネイだが、今後は資源枯渇問題と向き合わなければならない。